My Found MUJI

会 場：無印良品　有楽町2F　ATELIER MUJI
会 期：2012年5月11日(金)－6月10日(日)
時 間：10:00－21:00［無休］入場無料
URL：http://www.muji.net/lab/ateliermuji/

ATELIER MUJI

My Found MUJIとは

2011年に「あなたのFound MUJIを見つけてください。」という問いを、日本全国をはじめ世界の無印良品で働くスタッフ全員に投げかけました。My Found MUJIと題したこの企画は、Found MUJIとはなんだろう？という大命題に取り組むことでもありました。ある店はスタッフみんなで意見を出し合い、あるスタッフはカゴを編む職人に会いに行きました。こうして寄せられた品々には、知っていそうで知らなかった、地域のくらしに根ざした良いものが溢れていました。Found MUJIとは、決してどこか遠い国でつくられた珍しいものではありません。自分がくらす地域の日々のあたりまえの生活の中に存在するごく身近なものたちです。この度ATELIER MUJI「My Found MUJI」展では、その中から日本各地の代表的なものを選出し、スタッフの思いとともに、ものの背景をご紹介します。

Found MUJIとは

無印良品はもともと、ものをつくるというよりは、「探す、見つけ出す」という姿勢で生活を見つめてきました。永く、すたれることなく活かされてきた日用品を、世界中から探し出し、それを私達の生活や文化、習慣の変化にあわせて少しだけ改良し、適正な価格で再生してきました。2003年からは、この活動を「Found MUJI（見出されたMUJI）」と名付け、さらに世界の細部にまで入り込みながらよいものを探す旅をはじめました。見出されたものたちの中には、そのままの品質ではわたしたちの生活に取り入れにくいものもあります。それらを今の生活の品質基準に合わせて、製作者と対話しながら改良し、無印良品のものとして仕立て直します。

On My Found MUJI

In 2011, we asked all people in our company, including those working overseas, to find their own pieces that are worth including in the Found MUJI lineup. This comprehensive "My Found MUJI" project did help to clarify the definition of articles that are worth marketing through our network. Employees of several MUJI shops held brainstorming sessions, while another staff decided to meet a craftsman of woven baskets, following his hunch. We made a lot of discoveries through this project. Among them are quite a few functional articles that are deeply rooted on local lives, which have been mostly overlooked in other areas. Found MUJI lineup doesn't consist of rarities from overseas; rather, they are everyday commodities used in our own country, mostly for a long time. "My Found MUJI" exhibition by ATLIER MUJI shows you what our staff found so far. Each piece's background is explained in detail, together with the comment from the person who picked it up. We hope you enjoy the show.

What is "Found MUJI"?

The spirit of Muji is in searching for the best existing solutions. We have traveled a lot to find the locally-made, high-quality commodities, gave modifications to match our own lifestyle, and released them in market with fair price. In 2003, we strengthened this activity further under the banner of "Found MUJI" and we started making trips to the tiniest villages in Japan and farthest corners of the world. Honestly, some of the items that caught our attention are not completely compatible to the lives in Japan as they are. In such cases we give improvements through discussion with each manufacturer for mutual benefit. The result is a unique product line that keeps all the local flavors, tailored to the Muji standards.

アットゥシ織［北海道］

北海道の先住民族であるアイヌの織物です。原材料はなんと樹木の皮。皮を裂いて糸をつくり、織り機にかけて糸は布へと形をかえます。先人の知恵と工夫があってこそ生まれた商品であり、自然からの素材を追求した、まさに「無印良品」です。

札幌ステラプレイス　白幡 元

アイヌ民族の古来から伝わる伝統織物のアットゥシ織です。オヒョウニレという広葉樹の内側の樹皮を剥ぎ、釜で煮るか沼に沈めて繊維のヌメリを取ります。それを1枚ずつ剥がし、細かく裂いて糸を紡ぎ、織機で反物に織り上げます。柔らかく強靭なアットゥシ織はアイヌの人々の衣類に使用されてきました。現在は、オヒョウニレの減少と全行程が手作業のため、大変貴重なものになっています。

あけびのカゴ［弘前市/青森県］

どんどん数が減ってしまっている職人さんの手仕事によりつくられるあけびのカゴは、持つ人の手のあぶらによりどんどんなめらかな風合いに変化します。何十年も一緒に成長していく感じが一番の魅力です。

有楽町　奈良 恵梨香

香青森県のあけびつるのカゴです。あけびは、八甲田、十和田一帯に自生する落葉蔓木です。江戸時代の末期、岩木山麓の盛温泉で、湯治客への土産品として、旅籠や手提げカゴをつくったのがはじまりとされています。つるの皮部から編みとげまで全てが手作業のため、膨大な手間暇がかかります。あけびつるは丈夫なので、年を経るにしたがって光沢を楽しむことができます。親子数代にわたって使用されているのも珍しくありません。

南部鉄器［奥州市および盛岡市/岩手県］

岩手に住んでいる方なら誰でも知っている、地域に根ざした伝統工芸のひとつです。お湯を沸かすだけで鉄分がとれる優れものです。鉄瓶だけではなく、鍋やフライパン、風鈴など様々な商品があるのも魅力です。

盛岡フェザン　管原 朱美

南部鉄器は、岩手県の奥州市と盛岡市で生産される鋳造の鉄器です。この土地では、古くから砂鉄、岩鉄などの良品な鉄資源や、川砂、粘土、漆、木炭などの原料が産出されていました。江戸時代初期に京都出身の釜師が茶の湯釜をつくったのがはじまりとされています。その後、煎茶が流行すると茶釜の寸法を縮め、ロとツルをつけた鉄瓶がつくられるようになり、湯沸かしの日用品として広く知れ渡るようになりました。

坊っちゃん石鹸［仙台市/宮城県］

坊っちゃん石鹸は最高級の原料にこだわり、添加物が無い純粋無添加の石鹸で、赤ちゃんやお年寄りなど肌が弱い方でも安心して使えます。肌への刺激が少なくみずみずしい使用感です。もともとは、絹織物を洗う石鹸として誕生したため、衣類洗剤や食器洗いにも使えます。

泉中央セルバ　齋藤 徹平

宮城県仙台市で生産されている石鹸です。大正時代に仙台の三百人町で生まれた皆なからの製法を継承してつくられています。ゆっくりと丹精をこめてつくるため、できあがるまでに8日間かかります。時間をかけた自然結晶法の技術と最新の設備からつくり出されています。

樺細工［角館町/秋田県］

贈答品から普段使いまで、永い年月愛されてきた樺細工。なめらかな手触りと、深い艶は大切に使い込むほど増していきます。美しい工芸品をつくり上げた先人のひたむきと努力に感謝！

イオンモール秋田　宮田 智弥

秋田県の角館（かくのだて）でつくられてきた樺細工は、サクラの樹皮を使ってつくられます。樺（かば）とはもともと全ての樹皮を意味する言葉だったことから、樺細工と呼ばれるようになったようです。一部の山伏に伝えられてきた技術が民間に伝わったといわれており、江戸時代より武士の手内職として発展しました。

チェリーピロー［東根市/山形県］

さくらんぼを加工した際に出る産業廃棄物である種。そのさくらんぼの種の中が空洞になっている特色を生かして出来た枕。自然の力で出来た枕。従来は廃棄されていたものから出来ている枕。究極のエコロジーです。

七日町　布施 麻子

山形県の中央部に位置する東根市は、さくらんぼの生産量が日本一です。ヨーロッパのチェリーブランデー醸造所で、さくらんぼの種をストーブで温め、体の痛いところや冷えたところにあてて疲れを癒したことをヒントに枕をつくりました。さくらんぼの種は硬い殻で覆われ、中に芽を出す胚があり、乾燥させることで空洞になる部分があります。その空洞に熱がこもる特性をいかしています。保温、保冷どちらにも使うことができます。

からむし織［昭和村/福島県］

からむし織は約600年の歴史を誇ります。本州唯一のからむし（苧麻）の生産地である福島県の昭和村で、村民の手から手へ大切に受け継がれてきました。その品質の高さは歌舞伎の小道具（兜巾）に採用されるほどでした。世界へ向けておすすめしたい福島人の手仕事です。

エスパル福島　菊池 真理子

からむし織は、苧麻（ちょま）と呼ばれるイラクサ科の多年草植物の皮からできた織物です。福島県の昭和村は本州唯一のからむし生産地で、室町時代から栽培されていたとされています。細かく裂かれた繊維を糸に紡ぎ、織機で織られます。反物になると100年は持つといわれるほど強い繊維です。通気性や吸水性に優れており、「氷をまとったような涼しさ」と称されてきたように、高温多湿な日本の風土にあった機能的な織物です。

経木［茨城県］

紙が普及する前の記録媒体として用いられ、何度も書き直せます。また柔らかく通気性・殺菌性にも優れ食品の包材としても重宝され、使用後は簡単に焼却でき、堆肥化にも優れています。汎用性のある環境に優しい素材です。

販売部エリアマネージャー　宮部 昭秀

樹木を薄く削った板を経木（きょうぎ）といい、経文を書き込むなどの記録媒体や、食品の包装など古来より広く使われてきました。近年、その役目は紙やプラスチックのトレーや袋にかわっていますが、樹木の通気性や殺菌性を生かした素材として、見直されています。

日光下駄［日光市/栃木県］

江戸時代の人の「草履を歩きやすいものに」という気持ちが、草履の下に下駄をつけるというアイディアに繋がりました。下の方が広い歯でぶらきになっているため、履いたときの安定性が良く、実用的で見た目にも美しい伝統の一品です。

宇都宮インターパークビレッジ　三和 祐太

日光下駄は、日光山の神域境内の履物として つくり出されました。江戸時代神域境内に入る僧侶や参拝者は、草履に木の台をつけた「御免下駄」に履きかえたそうです。コロ字型の台木が特徴的ですが、歩きやすいように普通の下駄の形にしたものや女性向けのものもつくれるようになり愛用されるようになりました。

日野竹細工［藤岡市/群馬県］

人里離れた民家でご年配のお父さんとお母さんがお二人で守っています。ひとつひとつを手作業で編み上げているので、温かみ味があり、竹のいい香りが漂ってきます。また個々に表情が違います。お父さんが商品を我が子のように紹介してくれた様子が印象的でした。

けやきウォーク前橋　今村 浩一郎

群馬県藤岡市日野地区では、養蚕や農作業に用いる竹細工を農閑期の手仕事としてつくってきました。かつては多かった職人も、今では1軒のみになってしまいました。地元の竹を使ってつくるカゴは農機具の素朴な機能美を伝えています。

春日部桐箱［春日部市/埼玉県］

桐は山の自然木と違い、昔から計画的に植林し伐採されています。たんすや琴などの高級品作成時に出る端材を有効活用して桐箱にしています。春日部の桐箱シリーズは、生活者視点に立った機能美とあわせて、無印良品のものづくりのコンセプトに共通した点を数多く持ち合わせています。

ララガーデン春日部　今野 孝宏

埼玉県春日部市でつくられる桐箱です。江戸時代初期に日光東照宮造営に参加した工匠達が故郷に帰る途中、粕壁宿（かすかべしゅく）に良質な桐が生育する種子を見て住み着き、桐たんすがつくられるようになりました。農民が農閑期に桐たんすに向かない端材を利用して箱枕、文箱、針箱、印籠など、様々な種類の桐箱が生産されるようになりました。軽量で、火や水に強く、防湿性も併せ持っている桐箱は、大切なものの収納に最適です。

御身洗い［木更津市/千葉県］

魚を捕獲するときの網として使用されている頑丈で丈夫な素材を使用しています。汚れを落す効能に優れており、体を洗うタオルや洗顔時の泡立てネット、また石鹸の材料としても活用されています。

アリオ蘇我　飯塚 史暁

御身洗いは、漁業用の網を使ったボディタオルです。かつて地元では、身体を洗うのに漁網の廃切れを使っていたそうです。東京湾沿岸で海苔やイワシをとってきた網屋さんが考案し、販売しています。少量の石鹸でもよく泡立つように、糸の太さや数を調整しています。丈夫で耐久性も抜群です。

江戸箒［中央区/東京都］

幼少期、部屋を箒で掃くのがお手伝いのひとつでした。箒の先が斜めになっているのでとにかく掃きやすく、当たりが柔らかいので力を入れなくても掃きだせ、子供でも簡単に使えます。使い減らしたら玄関用としても使え、永く使用できるのも魅力です。

MUJI東京ミッドタウン　大前 昌照／池袋西武　藤田 真弓

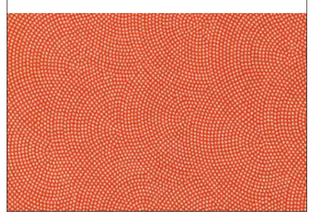
江戸時代の終わり頃、銀座・京橋にて生まれました。庶民の住居に畳が普及し、畳にあった箒、長屋暮らしにぴったりの江戸箒の担ぎとして使われるようになりました。熟練の職人によってほうき草が選別され、丁寧に編み上げ、仕上げられています。当たりが柔らかくてコシがあるので、力を入れなくてもサッと掃き出しやすいのが特長です。

江戸小紋［東京都］

武士の礼服から発達した江戸小紋。限界への挑戦とも思える様な、一見無地に見える細かい柄が特長で、様々なシーンに溶け込みます。無限の差異を求めて楽しむ美意識と、周りとの調和を基礎としながらきちんと存在感を示す「粋」を強く感じます。

中野マルイ　有木 一郎

江戸小紋のルーツは室町時代にさかのぼります。当初は武具である鎧の革所や家紋などに用いられました。江戸時代のはじめ頃から武士の裃（かみしも）の染めが行われ、町人文化の発達とともに庶民に普及しました。和紙を洗練で加工した型紙で、反物一面に広がる白抜きの繊細な柄を染めていきます。様々な柄がありますが、大名の裃柄が発祥のものが「定め小紋」。庶民の遊び心から発祥したものが「いわれ小紋」とされています。



シウマイ弁当の醤油入れ［横浜市/神奈川県］

味気の無いただの醤油入れなら世の中に掃いて捨てる程存在する。この醤油入れだからこそ、今日も駅の売店の行列は留まる事を知らないのだろう。用途は幅広く、醤油入れ、箸置き、置物、癒しのツボ…私の嫁入り道具。

Colette-Mareみなとみらい　永田 容子

神奈川県横浜名物の崎陽軒のシウマイに入っている醤油入れです。発売当初の昭和3年はかさなりプラスのビンで、戦後、ひょうたん型の白い磁器になりました。昭和30年、その醤油入れに浪曲家の横山隆一さんがいろは48文字にちなんで48種類の表情を描いたのがはじまりで、「ひょうちゃん」と名づけられました。現在は、初代を復活させた3代目が入っており、シウマイ同様に永きにわたり愛され続けています。

鎚起銅器［燕市/新潟県］

燕市は新潟県の真ん中に位置し、洋食器の世界的な産地です。そんなプロフェッショナルが集まる燕市の中でも歴史深い鎚起銅器。江戸時代から燕市の生活、産業に根づいています。職人ひとつひとつ丁寧に仕上げる器は、使い込むほどに風合いが増し、普段の食事がスペシャルにかわります。一生使い続けたい、受け継いでいきたい器です。

イオン新潟南　宗村 綾子

新潟県の燕市でつくられる鎚起銅器です。燕の金属加工は、江戸時代の初期の和釘づくりがはじまりとされています。江戸の後期、仙台の職人が燕に鎚起銅器の製法を伝えました。近郊の弥彦山から優良な銅が産出されることもあり、この地で発展していきます。様々な種類の道具を使いながら銅を叩き、打ち起こしていきます。一度叩くと銅は硬くなるため、製作途中に火炉の中に銅器を入れ柔らかくし、最後に着色を施し完成します。

錫製の食器［高岡市/富山県］

酸化しにくく、金属アレルギーになりにくいといわれる錫（すず）の歴史は古く、日本でも正倉院に錫製の宝物が納められているほど。金属でもありながら柔らかく人肌に馴染みます。

富山ファボーレ　中力 基博

富山県高岡市は、銅や青銅をはじめとする非鉄金属工芸を得意とする鋳物の街です。江戸時代の初期、加賀藩主前田利長により高岡の地に鋳物工場が開かれ、梵鐘や仏具などがつくられてきました。その鋳物の技術をいかした錫の食器です。錫は隋唐・奇良時代に中国から伝えられたといわれ、金や銀に次ぐ高級な金属として貴族階級の道具に使われていましたが、江戸時代には庶民の間でも酒器などの材料として重宝されました。

金沢箔［金沢市/石川県］

今日では、国内の99%以上が金沢で生産されています。そんな金箔は数多くの国宝や伝統工芸に使用され華麗な美しさと気品を生み出しています。日常生活の中での金の輝きが楽しめます。

めいてつ・エムザ　佐村 卓也

金沢箔（かなざわはく）は、金沢でつくられる金箔です。向こう側が透けるほど薄く、わずかな風でも飛んでしまうので、雨や雪が多い金沢の高湿な気候が箔打ちに適していました。戦国時代、加賀藩の前田利家が製造を命じた記録がありますが、それ以前から工人がいたとされています。金箔帯、印光東照宮をはじめ、漆工芸、仏壇仏具や織物、九谷焼など、様々な分野で使われるようになりました。

越前和蝋燭［福井市/福井県］

火を灯していると炎が次第に大きくなるため、途中で芯を切り炎の調整が必要です。正直、少し手間がかかります。そのかわり、ゆれる炎が安らぎと贅沢な時間を与えてくれます。また、和蝋燭は植物性原料を使用しているため、人にも環境にも優しいです。

福井西武　雨霧 光寛

和蝋燭は、6世紀半ば、仏教伝来と共に大陸より伝えられました。現在でも永平寺をはじめとする寺院で使われています。福井で製造が続けられているのは、信仰心が強い土地柄のためといわれています。竹串に和紙を巻き、い草科の灯心草を巻きます。ハゼの実からできた木蝋（もくろう）をつけて芯を固め、それを木型に入れ蝋を流し、イカリ型や棒型に整えられて完成です。芯が太いため炎が大きく、煙が少ないのが特長です。

甲州印伝［甲府市/山梨県］

鹿革に漆で模様をつけた革の伝統工芸品。山梨県では、江戸時代からお祝い事や記念品として贈られています。そんな山梨県民の「贈る気持ち」を全国へお届けしたいと考えております。

キュースタ富士吉田　今村 友彦

甲州印伝は、鹿革に漆で模様を施した製品です。四方を山に囲まれた山梨県の甲州市では、古くから鹿革や漆がとれ、産地が形成されていました。インドの装飾革が幕府に上納された際に応帝室（インデヤ）革があり、印度伝来を略して印伝となったとされています。江戸末期には巾着袋、煙草入れ、財布などがつくられ、実用と装飾を兼ね備えた品々が庶民に愛好されました。柔らかく丈夫で軽い鹿革は使い込むほどに手に馴染みます。

寒天［茅野市/長野県］

綺麗な水と、澄んで冷たい空気だからできる、長野の名産品です。デザートに使うのも良いけれど、お米を炊くときに、少量ちぎって入れてみてください。もっちりとおいしいご飯ができあがります。

松本パルコ　関 裕子

長野県諏訪地方の農家の副業として広まった寒天づくり。江戸時代の終わり頃から、厳しい気候と八ヶ岳連峰より流れ出る清流、手間ひま掛けたベテラン天屋衆（てんやしゅう）の丁寧な手作業によってつくられています。食に安全な原料（天草・海草）を吟味し、無添加、無漂白の天然製法です。

水うちわ［岐阜市/岐阜県］

うちわの柄に提灯、金魚の絵などを使い、夏の暑い時期でも見た目から涼しさを感じられる郷土名品です。鵜飼観覧や花火大会のお供に、ぜひいかがでしょうか？

アクアウォーク大垣　伊藤 実穂

岐阜県岐阜市の水うちわは、極限まで薄く進いた履皮（がんぴ）紙を竹の柄に張り、天然のニスを塗って仕上げます。履皮とは植物の皮のことで、一般的に使われるコウゾに比べ繊維が細く、薄い和紙に仕上げることができます。長良川の鵜飼を見物しながら、水に浸して扇ぎ涼を楽しんだそうです。

茶箱［掛川市/静岡県］

湿度の高い日本の気候の中でお茶を最適に保管する為にできた箱。あくまで脇役、それ故に素の佇まいで、凛としている。地元の杉材で職人の経験と技、手仕事で丁寧につくられています。最近ではサイズオーダーやテーブルやイスにされたりと、くらしの中で愛用されています。

静岡　柳沢 孝明

茶の生産が盛んな静岡県掛川市で、茶葉を保管するための保存箱として注文を受けてつくられています。湿気の侵入を防ぐための大井川周辺で採れる杉材、隙間に貼る和紙、地元のお麩屋さんに分けてもらう麩のり、といったように昔からかわらない素材を使っています。

小原和紙［豊田市/愛知県］

小原和紙は森林を伐採するのではなく、コウゾの栽培をすすめ、全て自然のものからつくり上げられています。工程は全て手作業で行われ、乾燥の段階においても天日に晒すことで独特の柔らかい色合いの和紙になります。環境にも優しいです。

栄スカイル　林 潤子

豊田氏小原地域の紙漉きは農閑期の副業としてはじまり、江戸時代中期には、番傘用紙や障子紙、神社のお札紙など、盛んにつくられるようになりました。昭和に入り、紙の需要が減ってきた折、芸術家の藤井達吉の勧めで、原料のコウゾを染色し、絵柄を漉きこんでいく工芸が生まれ、小原和紙に新風をふきこみました。

松阪木綿［松阪市/三重県］

深みのある青と「松阪縞」と呼ばれる縦縞の素朴な風合い、無駄に飾らず派手に目立たぬ事を粋と考えるのが「松坂木綿」です。私達の目指すものづくりに多くの共通点があると思い、三重県の代表アイテムとして推薦致します。

イオンモール鈴鹿　原島 涼子

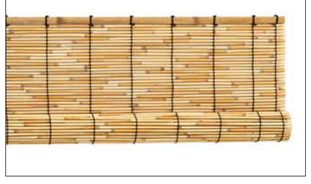
松阪木綿は、三重県松阪市付近でつくられる織物です。16世紀初頭、古代から伝わる紡織技術と、綿花や藍の栽培に適した土壌により育まれました。江戸時代になると松阪商人は江戸に店を持ち、安くて丈夫で柄が新鮮な松阪木綿を売り出します。粋を好む江戸の庶民の人気を集めました。藍で染めた糸（先染め）で織られた木綿は洗うほどに色が浮き、長持ちするといわれています。

琵琶湖葦［近江八幡市/滋賀県］

葦（ヨシ）は琵琶湖の周囲に大群落をつくり、成長することで水を浄化する働きがあります。琵琶湖の水質を守ってくれるだけでなく、刈り取りの後も日よけの葦簀などに加工され、風通しが良く、遮熱効果が高い事から、夏を快適に過ごす生活の知恵として根づいています。

ピエリ守山　長田 知世／大津パルコ　木村 修士／大津西武　嶺縣 由梨子

琵琶湖とその周辺に広がる葦の群生地は、万葉集にも歌われるほどに雄大な原風景でした。古来より葦は浄化、魔除けの力を持つと信じられ、破魔矢（はまや）や御葦流しなどの神事と結びついていました。魚や鳥の生息場、繁殖場として琵琶湖の水質浄化にも大いに貢献しています。刈り取られた葦は、屋根葺きやすだれなどに加工され、近江商人によって京都をはじめとする消費地に広がり、生活の中で利用されてきました。



近江上布［愛荘町/滋賀県］

愛知川の豊かな水と高湿度な環境や、近江商人の活躍により、滋賀県では鎌倉時代より麻織物が発展し、江戸時代には安定した地場産業となりました。経糸・緯糸を重ねて織る技法と、同時期に発展した染めの技術により、近江上布独特の絣模様が生まれました。

大津パルコ　木村 修士

近江上布（おうみじょうふ）は琵琶湖の東岸、肥沃で湿潤な気候に育まれた麻布です。上布とは、幕府への上納品として用いられたことから名づけられました。室町時代から農家の副業として織られた上布は、近江商人が売り歩きその名が知られるようになりました。江戸時代になると、原料藍の保護統制のもとに、着尺地、蚊帳地などがつくられ、夏の蒸し暑い京都などで消費されました。現在も伝統を守りながら着物や半衿などを中心につくられています。

深草うちわ［左京区/京都府］

1本1本手づくり。竹製、プラスチック製のものよりいい風が起き、しかも丈夫です。電気代ゼロで、扇風機よりもちょうどいい風をちょうどいい間起こすことができます。この夏にどうですか？よろしおすえ。

近鉄桃山　古谷 信人

江戸時代の中期、京都の深草の竹を使い、やや縦長のなつめ形のうちわがつくられました。これが深草うちわのはじまりです。京の花街で芸妓さんや舞妓さんがお稽意様へ配る、白地に朱色で名や家紋がかかれた「京丸うちわ」は、深草うちわを元につくられました。国産真竹の骨に、魔をはらう力があるとされている日少紙を貼り、丁寧に仕上げています。

注染手ぬぐい［大阪府］

大阪で生まれた技術「注染」は生地の糸そのものを染めるので、表面と裏面で同じ柄、同じ色が表現でき、独特のにじみが生まれます。汗を拭いたり、贈り物を包んだり、飾ったり、色々な使い方があります。皆さまはどのように使いますか？

難波　南 秀康

注染（ちゅうせん）とは明治時代に大阪ではじまった染色法です。染色したい場所にのりで土手をつくり染料を注ぎます。裏表両面から染めていくため、表も裏も同じ柄が同じ色合いで出ます。生地についた余分なのりと染料を水で流し、天日で干して完成です。1度にまとめて20～30枚染めることができます。手仕事のため、若干の色ぶれやにじみが生まれ、プリントにはない風合いを楽しむことができます。

トタンのちりとり［大阪市/大阪府］

トタンちりとりは大阪の町工場で職人さんの手仕事でつくられているちりとりです。素朴でとてもシンプルな形。ほうきと一緒に壁にかけることができ、インテリアとしても美しい形で生活の風情を感じられます。プラスチックよりも丈夫なトタンは使い込むほどに味が増し、永く愛用できます。

有楽町　小林 範子

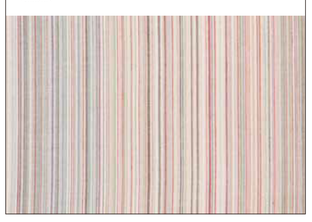
大阪市東成区で職人によってつくられるロングセラーのトタンのちりとりです。東成区は日本でも有数の町工場が集まる地域として戦後発展し、大阪の経済を支えてきました。トタンとは、亜鉛メッキを施した鋼板のことをいいます。コンパクトで、ほうきでゴミを集めて掃き込みやすいのが特長です。

播州織［西脇市/兵庫県］

西脇市中心で生産されている播州織。糸が不足していたため残糸を集めて織物にした「やたら縞」が有名です。大きな色もバラバラ。「二度と同じ物が出来ない」と当時は粗悪品として扱われていましたが、今は逆に希少価値が高まり自分だけのオンリーワン商品として人気です。

アクタ西宮　橋本 純子

兵庫県西脇市を中心につくられている織織物です。江戸時代後期に西陣織から技術を取り入れ、農家の副業として育まれました。明治、大正、昭和を経て、主にシャツ生地を織出向けに生産されていました。昭和22年頃、残糸で織られた「やたら縞」が生まれました。糸の色、太さもバラバラで、当時は粗悪品として敬遠されていましたが、縞柄の幅と色彩との組み合わせが新鮮として見直され、近年復刻されました。



蚊帳織りのふきん［奈良県］

使っているうちに柔らかくなり、吸水力もあるので、食器ふきんとしてだけでなく、料理の下ごしらえ、台ふきん、最後には雑巾に、と用途をかえて永く使っていただけます。

イオンモール橿原　常永 亜弥・吉岡 香奈

奈良は古くから都がおかれ、僧や神官の衣として薄織物がつくられていました。江戸時代の中期頃、農家の家内労働として蚊帳を地つくりがおこなわれました。明治に入ると、安い片面蚊帳（麻と綿の混紡）がつくられ、蚊帳や寒冷紗（かんれいしゃ）の発展につながりました。近年、生活様式の変化とともに需要が少なくなった蚊帳生地。吸水性がよく乾きやすい特性を活かし、重ねて縫製され、ふきんとして見直されています。

根来塗［海南市/和歌山県］

現在の和歌山県岩出市にある根来寺で、当時の僧侶達が日用の道具としてつくっていた器です。かすれのような黒い模様は、実は偶然の不手際から生まれたのですが、かえって趣があるということで、今でも職人さんが手仕事でつくりあげています。発祥が普段使いの漆器なので、とにかく使いやすいです。

ガーデンパーク和歌山　櫛 俊輔

和歌山県海南市でつくられている根来塗です。室町時代に栄えた根来寺やその近辺でつくられるようになりました。技術が未熟のため、使用しているうちに露出した下塗りの黒漆がかえって趣があると言はれ、故意に朱漆を研ぎ、根来塗とよばれるようになりました。安土桃山時代、豊臣秀吉の根来攻めにより散り散りになった僧や工人たちが、海難寺江冬はじめ、会津や輪島、薩摩に行き着いて、漆器づくりの技法を伝えたとされています。

因州和紙［鳥取市/鳥取県］

こんな時代だからこそ、大切にしたい日本文化。平安時代から受け継がれた様々な表情を持つ本物の和紙を紹介します。

イオンモール日吉津　松浦 裕之

鳥取県鳥取市でつくられる因州和紙は、コウゾ、三椏（みつまた）、雁皮（がんぴ）の皮を配合してつくります。なめらかな表面が特長で、書道用紙として愛用され、画仙用紙は日本屈指の生産量となっています。

出西生姜［斐川町/鳥取県］

最初はやさしい甘さが広がり、後から心地よいからさがきます。からすぎないのでお子様にも安心して食べて頂けます。ポカポカするので就寝前に一口食べたら寝つきが良さそうです。料理の隠し味にも使えそうです。

ゆめタウン出雲　鍵山 智厚

島根県斐川町出西地区の限られた生姜畑で栽培されている生姜を使用しています。繊維が少なくピリっとした辛味が特長の出西生姜は、かつては近国の諸大名への献上品とされていたそうで「喉にやさなら出西喉へ、生姜の匂いて風邪ひかぬ」と唄われていたこともあるとか。生姜糖は、炭火で生姜の絞り汁と砂糖を溶かして銅製の型に流し込む、昔からの製法でつくられています。個包装されているので、お茶うけや手土産にもどうぞ。

い草の座布団［宇城市/熊本県］

熊本県は日本一のい草の産地です。い草は立体の柔組織で構成され熱の遮断に優れています。また、様々な香り成分を含むことから、リラックス、消臭・脱臭効果が得られます。近年の自然素材の見直し、健康志向の高まりにより、再びその価値が注目されています。

熊本パルコ上通り　松永 光

熊本県の宇城市の福祉作業施設、熊本県くすのき園でつくられているい草の座布団です。い草の香りと適度な柔らかさが特長です。熊本県では戦国時代からい草が栽培されてきました。い草は畳となって日本人の生活様式を支え、華道や茶道など伝統文化の形成にも深く関わってきました。この座布団は身体に障害を持つ方々によって、熊本産のい草を編機で織り込む作業、仕上げ、検品まで、ひとつひとつ丁寧につくられています。

い草の手織緞通［倉敷市/岡山県］

和でも洋でも合う、控えめなのに存在感がある手織緞通。永く使っていただけるエコな商品です。

岡山ロッツ　真野 道子・橋 里恵・森 美枝／池袋西武　真室 祐子

岡山県倉敷市はい草の栽培が盛んな地域です。江戸時代には畳表などがつくられていましたが、昭和に入り刈り上げが落ち込みました。そこで和洋どちらにも合う敷物を考案され、その後柳宗悦氏の指導に生まれたのが倉敷緞通（だんつう）です。緞通とは、厚手で手織の敷物をさします。い草、和紙、綿糸、スフ（レーヨン）などを用いているので蒸れにくく、埃も立ちにくいのが特長です。四季があり湿気の多い日本に適した敷物です。

宮島しゃもじ［宮島町/広島県］

宮島しゃもじの由来が「御飯を掬い取る・飯取る」から「敵を飯取る」となり「幸運・福運・勝運」を招くものとされ、縁起物として高校野球の応援などにも使われています。毎日使う物だから、明日の活力に御飯をよそう…。丸みをおびて手になじみやすいお気に入りの1本です。

福山キャスパ　相川 綾

日本三景として知られる景勝地、広島県の宮島（厳島）でつくられているしゃもじです。桜の美しい木目となめらかな木肌が特長です。江戸時代後期